移住者が暮らしたくなる地域づくり

～地域住民と移住者が共に作り上げるふれあいのまち～

岐阜県白川町　鈴村 元秀

１．はじめに

人口減少と少子高齢化が進むなか、白川町でも若者が就学や就職を機に町を出て行きその後も故郷へ戻ってこない状況が続いている。慢性的な若者・後継者の流出により、集落のマンパワーが低下し、空き家や遊休農地が増え、このままでは集落を維持していこうとする気概が失われてしまうことが懸念される。

そうした農山村に、近年増加している都市からの移住者の存在がある。地域住民が自分の集落の未来を考え、集落の関係性を再構築するとき、地域住民と移住者双方が安心して暮らせる集落を作り上げることで、農山村に少しでも多くの人が暮らし、集落を元気にすることが出来ないだろうか。

農山村は長い歴史の中で様々な生活の知恵や文化を継続してきている。食料自給を守る農産物の生産現場でもあり、都市部へ水や空気を送るいのちの供給を行ってきた。農山村を諦めることは、日本の文化や知恵、未来を諦めることになるであろう。

そこで、本稿は白川町の人口動態や集落の現状を分析するとともに、地域住民の取り組みと移住者の動向を考察し、まちを元気にする提言を行うものである。

２．白川町の概要及び人口動態の現状

（１）地理及び経緯

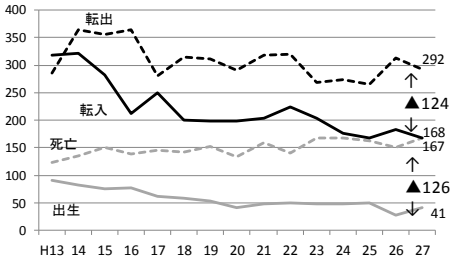
白川町は、岐阜県の東部中濃に位置し、3 市 2 町 1 村と接している。昭和 28 年から昭和 31 年にかけて 5 村が合併し現在の町域が形成され現在も旧村地区の地域性が色濃く残る。面積は 237.89Ｋ㎡となるがその 88%を山林が占め、可住地面積は全体の 5%ほどである。

町の西部にはＪＲ高山線と国道 41 号線が走るが、交通の利便性は良いとは言い難い。また、町に唯一あった高等学校が平成 21 年に閉校となり、高校生は前述の JR で 3 駅隣りの市へ遠距離通学するか、寮等に下宿することになった。

（２）人口動態

白川町の人口は、昭和 35 年の 16,909 人をピークに減少が進み、平成 27 年には 8,392 人と半減した。近年においても人口減少は加速しており死亡数が出生数を上回る自然減と、転出者が転入者を上回る社会減の状態が続いている。

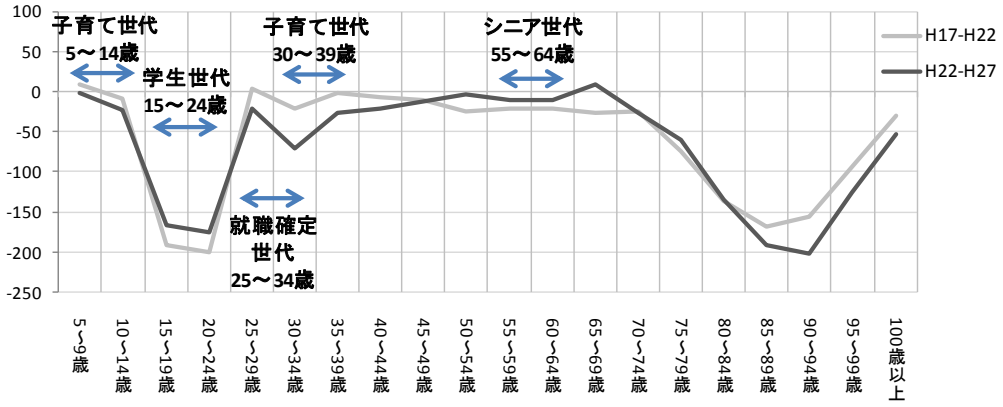
（図1．白川町の人口動態の推移）



（３）白川町の人口増減のコーホート分析

次に白川町の年代ごとの人口動態を調査するために、各年の国勢調査年代別人口を平成 17 年～平成 22 年と平成 22 年～平成 27 年の人口増減を図化し、現状を分析する。

図２．年代別人口増減の推移（出典：国勢調査年齢階層別人口より筆者作成）



人生の節目であるライフイベントを以下の４世代に区分し、その世代の人口増減から白川町の人口移動の傾向を分析する。

「学生世代（15～24 歳）」は、町内高校の廃校や交通アクセスの問題から多くの流出を招いている。

「就職確定世代（25～34 歳）」は、地域に安定的な就業機会があるか読み取ることが出来る。雇用のある自治体では、この世代のグラフがプラスに転じ流出した学生世代のＵターンが起きる。だが白川町ではＵターンが起こらずマイナスとなっている。

「子育て世代（5～14 歳、30～39 歳）」は、子育てにふさわしい地域であるか読み取ることが出来る。近年に減少数が悪化している。

「シニア世代（55～64 歳）」は、減少傾向が近年になり落ち着いている。

以上の分析から明らかとなったのは、一度町外へ流出した若者世代のＵターンが行われていないことである。ひいては、その後の子育て世代の流出も引き起こされており、如何にこの年代の減少を食い止めることが今後の課題となる。

白川町には、農山村の特性に沿った雇用の場がある。しかし、若者のＵターンが起こらないことから、若者世代にとって魅力的な仕事が不足しているといえる。今後行政として様々な働き方を提案し用意できる環境づくりを進めていかなければならない。また、Ｕターンが起こらない要素として「教育」も関係があると推測する。高校が閉校し町外への通学の負担から世帯ごと高校に近い市町へ転出するケースもあり、今後「仕事」「教育」の点からも、さらに移住者やＵターンを受入れる施策を進めていく必要がある。

（４）担い手・後継者の不足する集落

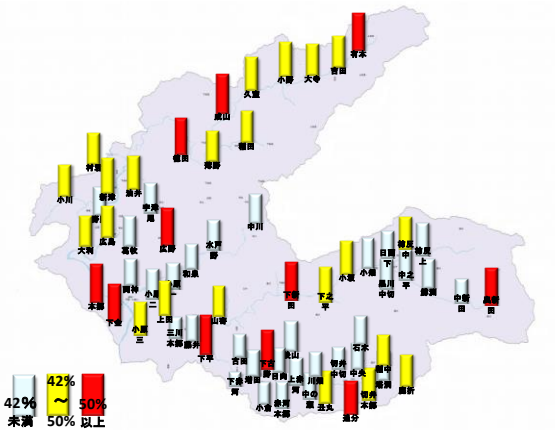
現在白川町には 65 自治会と 13 の自治協議会が存在し、住民相互の親睦や交流、共同活動、祭事等活動している。現在の自治会加入率は 95.6％で多くの住民が自治会に加入している状況である。

前項の人口動態のとおり、若者や子育て世代の減少から多くの自治会では高齢化が進んでいる。なかには高齢化率 50％以上の自治会も存在しており、共同活動や祭事を持続していくことが出来ず、今までに 5 つの自治会が他の自治会に編入又は合併している。

白川町の自治会全体の後継者の有無については、現在までその調査は行われていないが、

町全体の 66%を占める兼業を含む農家に対しては、平成 24 年に後継者の有無を「地域農業の将来に関するアンケート調査」にて調査している。回答者の 26.6%が後継者の「目処がついている」、44.8%が「目処はついていない」と回答している。後継者については 72.1%が「家族」と回答し、うち 19.6%が町外在住の状況である。農家に関するアンケートではあるが、集落全体に同様の傾向があると推測できる。

図３．自治会の高齢化率



（出典：自治会階層別人口より筆者作成）

（４）空き家や遊休農地の増加

人口の流出と高齢化の進む中で世帯数も減少しており、平成 18 年には 3,301 世帯あったが平成 28 年には 3,109 世帯と 10 年で 192 世帯の減少となった。世帯の減少に伴い空き家や遊休農地も目立つようになった。

平成 26 年 3 月に実施した「空き家・空き店舗等情報調査」では、町内に空き家が 451 軒確認され、多いところでは世帯の 47%が空き家という自治会もあった。451 軒の空き家のうち 23 軒は屋根や壁が崩れ落ちそうになった危険家屋である。

空き家の増加に伴い遊休農地も平成 22 年には 10.3ha だったが平成 27 年には 13.6ha に増加している。

図４．危険家屋の状況

３．白川町の地域住民及び住民組織の状況

ここでは、前章で明らかとなった担い手・後継者不足の現状から、住民組織に対し地域を持続していくにあたり移住受入に対する認識調査を行い、地域住民の意向と移住支援の現状を分析する。

（１）地域住民と住民組織の概要

「自治会」「自治協議会」は、任期で役員が交代し祭りや敬老会の運営、道普請や防犯・安全・環境施設の維持管理、地域住民の親睦を担う地域の基盤を守る組織である。それに対し、住民の課題意識から設立した「地域づくり協議会」は、都市農村・他地域多世代交流、地域でのイベントや公共交通等課題解決を求める住民参加の組織である。

「地域づくり協議会」は現在 2 地区で発足し活動しており、地域おこし協力隊の企画で都市圏の大学生ボランティアツアーを実施し、お茶畑の管理やお祭りの運営を手伝う等都市・農村交流を行っている。会員も、老若男女揃い子供と一緒に家族で参加していることも、前述の自治会組織とは異なる点である。このような活動は、自分たちの地域を守り持続していく気概をもって行われており、活動を支援するため集落全体で話し合い交流する機会が必要である。

平成 26 年に「地域の宝探しワークショップ」を 5 地区それぞれ 2 回開催したが、継続す

るための人財育成や組織化が行われずそれ以降は開催していない。参加者からは「他の人の意見が聞けて楽しい会議だった」という意見もあり、今後は積極的に話し合い、交流する機会が必要とされている。

このほかに住民組織として、ＮＰＯ法人等目的と持って活動する非営利組織も存在する。現在白川町には、5 つのＮＰＯ法人が認証され地域主体の活動を実施しており（別添資料.1)、中には有機農業を志す新規就農者の移住支援を行うＮＰＯ法人がある。

（２）住民組織へのヒアリング調査

各住民組織（自治会・自治協議会、「地域づくり協議会」、ＮＰＯ法人ゆうきハートネット（以下“ゆうきハートネット”））に集落・地域を持続していくための方法、移住受入の認識、移住者への支援策についてヒアリング調査を実施した。(別添資料.2)

①　自治会・自治協議会（上赤河自治会、東黒川自治協議会の 2 組織）

地域集落は、後継者のＵターンが少なく、「どうにかしたい」という危機感を抱いているが、具体的な方法が分からないでいる。移住者は、出来るなら受入れたいが、全体的に関心が薄く、どんな人が住むのか不安だと考える地域もある。移住者への支援策は、近所づきあいによる「信頼」が重要で、お祭りや共同作業への声かけ等が挙げられていた。

②　「地域づくり協議会」(白北地区を良くする会、清流 CLUB の 2 組織)

「地域づくり協議会」は、都市部の学生や地域住民同士の交流から地域を考え知ってもらうことで、絆や人間関係を再構築し、ふれあいによる活性化の先に移住・定住が生まれるとしているが、今は、「交流」の段階であり地域として移住を推進するにはまだ早いと考えている。移住支援は、将来的に地域にある自然や農地、空き家等を活かしたいと考えている。

③　ゆうきハートネット

移住者である有機農業者が地域に暮らし、空いた農地を耕作することで地域の賑わいと景観を守る役割をしてくれるとして、今まで積極的に多くの移住支援を行っていた。

移住支援について「仕事」は、有機農業の研修生受入と研修先の紹介、農地の紹介である。「住まい」は主に空き家の紹介を行っている。農地や空き家は、会員やその関係者が所有者と偶然にも親戚であったり、学校時代の同級生であったり等の血縁や地縁、町内に張り巡らせられたネットワークを活用し仲介を行っている。また、移住者を会員に加え会合や交流会等を行い移住後の「住民組織との関係」の支援を行っていた。

一連のヒアリング調査から地域住民は、自らの集落・地域に対し危機感を抱いているが、活動機会がない状況であることが見えてきた。移住者受入に対しては、地域によっては不安を感じていた。また「地域づくり協議会」は、地域の「雰囲気作り」が第一と考えており、活動の先に「移住の推進」が可能であると考えていることが分かった。また“ゆうきハートネット”は、移住者受入に積極的であった。

移住支援策について地域住民は、集落の「近所づきあい」が信頼を生むためそうした機会を設けることを挙げており、住民組織は、農地や空き家等地域資源を活かした支援を考えていることが分かった。“ゆうきハートネット”は、独自の移住支援策を持っていること

が明らかになった。

４．移住推進政策の取り組み状況及び移住者の状況

ここでは、前章で明らかとなった地域住民の移住者受入の認識に対し、移住者の側から見た地域に対する認識と、移住に際して必要な支援策を明らかにするとともに、町の移住推進策の取り組み状況を整理する。

（１）白川町の移住推進政策の取り組み状況

町が行う移住推進策の現状と移住希望者の動向を把握し、町内の移住者に対し移住の経緯とニーズをヒアリング調査することで､移住者を受入れるために必要な支援を把握する。

白川町の移住推進政策は、平成 27 年度から「白川町移住交流サポートセンター（以下サポートセンター)」を企画課内に設置し、職員２名体制と地域おこし協力隊の参画により移住相談や空き家バンクの管理、空き家の仲介や就職相談、移住者交流、移住体験、出張ハローワークを実施している。

移住相談内容は、仕事を探す移住案件が一番多く、次いで有機農業等の就農を希望する内容の移住が多い。

表１．サポートセンター移住相談件数

年度	合計	相談内容								
		就職移住	就農移住	林業移住	起業移住	芸術移住	二地域居住	Uターン	別荘	その他
H27	46	17	7	0	2	1	1	2		16
H28	36	12	7	1	4	1	2	0	2	7

（出典：サポートセンター相談記録簿より筆者作成）

移住者を受入れるにあたり必要な「住まい」と「仕事」と「地域住民との関係」の支援は、以下のとおりである。

「住まい」の支援は、サポートセンターが設置された平成 27 年以降、空き家バンクを利用して住まいを提供しているケースもある。センター職員が、移住希望者と家主の間で空き家の仲介を行っているが、空き家の貸し手を探し依頼する交渉に特に多くの時間を割いている状態であった。

「仕事」の支援は、行政として出張ハローワークを月 1 回開催する等移住者やＵターン者に対し情報提供を行っている。

「住民組織との関係」の支援は、移住地域への関係構築を行っておらず、移住者本人に任せている状況である。また 3.(2)住民組織のヒアリング調査のとおり有機農業の移住者を除き、地域住民や住民組織として積極的な受入れは現在行われていない。

（２）移住者の状況とヒアリング調査

白川町全体の移住者数は、近年まで調査を実施していなかったことや移住者の定義が不明であるため正確な数字が把握できていない。しかし、前述の“ゆうきハートネット”が把握している数字では、有機農業者に限ると過去 10 年までに 25 組 62 名の移住者の受入れが行われており、現在も 5 名が研修中である。また、サポートセンターを設置

	30代	40代	50代	60代	70代	合計
件数（農業者）	10 (5)	5	2	1	1	19 (5)
家族 ※本人含む（農業者）	25 (11)	6	3	1	1	36 (11)

表2. 年代別移住者数（サポートセンター提供）

した平成 27 年 4 月から平成 28 年 12 月までは、19 組 36 名（表. 2）の移住者を受入れている。

移住者の全体像をつかむために、平成 28 年 10 月 29 日に開催されたサポートセンター主催の移住者交流会にてヒアリング調査を実施した。そこでは 6 名に調査を行い、さらに調査対象者からほかの移住者を紹介頂き、後日訪問により、8 名の調査を実施した。（別添資料. 3）

調査した移住者の多くが、都市の暮らしや働き方や環境に疑問を持ち、その解決先として農山村への移住を決意している。白川町への移住後は、地元の人柄や綺麗な景色、周りの地域住民や他の移住者から得る安心感を得て満足していた。また、積極的に自治会や公民館の行事へ参加し、地域の役等を引き受けることで懸命に集落・地域へ溶け込もうとしており、集落の住民としての安心感を得ようとしていた。しかし、地域によっては住み辛い雰囲気を感じ取った移住者もある程度存在している。他には、他地域や他組織との交流の機会を必要としていた。

また、ある移住者は、有機農業の傍ら地元住民から依頼を受けて小学生の学習塾を開いていた。町外にある一般的な学習塾から距離のある地域に、子供たちが学ぶ機会を提供するという。地域課題を移住者が解決した例といえよう。さらに、一般的な学習塾での見ず知らずの講師より、顔見知りの近所で汗を流して働く「おにいさん」が教えてくれる経験は、子供たちにとっても地域への感謝や記憶に残るものと考えられる。

上記のヒアリング調査で出た意見のうち、移住者にとって「あってよかった支援」と「これから必要な支援」を、地域・集落、“ゆうきハートネット”と行政・サポートセンターのそれぞれについて以下のように整理した。なお、ヒアリング調査では「地域づくり協議会」に対する発言はなかった。

表３．移住者にとって「あって良かった支援」と「これから必要な支援」

	自治会等	ゆうきハートネット	町・サポートセンター
あってよかった支援	近所づきあい 小商いの紹介 (学習塾・援農作業)	有機農業の研修 空き家・農地の紹介 移住者間の交流	空き家バンク 空き家修繕費補助 青年就農給付金
これから必要な支援	地域全体の包容力 （雰囲気作り）	好条件の農地の紹介	他地域・他組織交流 農業研修・仕事のＰＲ

（出典：移住者へのヒアリング調査抜粋　筆者作成）

５．移住推進のためどのような取り組みが必要であるか

（１）移住者受入支援の現状と課題について

これまでは、白川町の現状と住民組織の状況、町の移住支援政策や移住者の状況を考察してきた。移住者の傾向をみると、就農を希望し白川町へ移住する人は、表. 2 で示す通り移住者の約半数となっている。だが、相談に訪れる移住希望者は、就農を希望する移住者の 4～5 倍も存在することから、就農希望移住者への支援はもちろんのこと雇用を希望する移住希望者への移住支援を強化することで、さらに多くの人が白川町に暮らすことを選択

できる環境が整えられる。

移住を支援するうえで必要な「仕事」と「住まい」と「住民組織との関係」を表．３と合わせ各住民組織に分類し現状と課題を整理する。

“ゆうきハートネット”は、地域住民との強い関わりを持っており、そのネットワークを活かし効率的な支援を行っているが、有機農業の移住者に限られてしまう。

サポートセンターは、行政の強みを活かした支援を行っており、「仕事」の支援は、ハローワークと連携して行い、「住まい」は空き家バンク等信頼度の高い支援が可能である。今後「仕事」については、就業機会のＰＲはもちろんのこと、ハローワークでは取り上げられない小商いやコミュニティビジネス等の可能性を探る必要があるだろう。また「住まい」については、好条件の空き家の登録を充実するためにも、地域住民や住民組織からの情報提供が必要である。「住民組織との関係」については、地域との強い関わりをもたないため、今後は他の住民組織と連携しながら取り組んでいくことが必要である。

自治会等は、近所づきあいや小商いの紹介等移住者が暮らすうえで大切な安心感をもたらしている。今後は、それらが地域全体に波及していくための活動が必要である。

「地域づくり協議会」は、前述したとおり都市農村交流によって地域全体の包容力を高める必要がある。

（２）移住者を受入地域住民と共に地域を元気にするための交流の場づくり

ここでは、地域住民と住民組織及びサポートセンターの移住支援策と、移住者にとって必要な支援策から、地域住民と移住者が安心して暮らせるまちづくりの方策を考える。

①　地域住民の思いがつながる場づくり

移住者が、都市部での生活から白川町での暮らしへ飛び込むことは、大きな勇気と不安があることは想像に難くないだろう。地域住民としても、若者の流出により地域の担い手が減少する中で、自分たちの地域を持続させていくことに大きな危機感を抱えている。移住者への関心も薄い中、見ず知らずの「よそ者」に対する不信感や不安が生ずる恐れも否定できない。このような状況を打開していくためにも自分たちの地域を「どうにかしたい」といった気持ちを考え語り合い、活動できる場を作り、地域住民と移住者が共に交流できる仕組みを構築していくことが必要である。

②　住民の不安を取り除き地域全体の包容力を高める

白川町では、現在 2 地区が自分たちの地域に誇りや愛着を取り戻すべく「地域づくり協議会」を組織し活動を始めている。都市・農村交流によって地域住民に、誇りや愛着を取り戻すことで地域全体の「よそ者」に対する包容力が高まるのではないだろうか。また、現在の組織は、地域住民だけの組織であるが、移住者との活動や交流が地域にあれば、このような活動を移住者と共に行うことが出来る。そして、この取り組みが町内各地域に組織され波及していくためにも前項のつながる場づくりが必要である。また、将来的には、空き家や遊休農地の活用や、コミュニティビジネス、移住定住等移住者の受入支援が可能な組織であるため、引き続き人財支援や交付金支援等組織育成を進めていくことが必要である。

③　住民組織の得意分野を繋げる町サポートセンターの必要性

白川町が運営するサポートセンターは、現在 2 名の職員で運営されている。地域おこし協力隊の活動によってサポートセンターの交流事業を補っているが、現在の状況では、住民組織の連携や交流事業が困難な状況である。しかし、住民組織のネットワーク構築は、これからの移住支援に必要であるため可能な限りの人員の補充を行い、交流支援を行うことが大切である。

サポートセンターの移住支援は、地域の情報収集や、様々な組織との関係が形成されていないという課題があり、地域住民等との関係構築については移住希望者に任せている現状である。空き家についても、地域での管理人等の情報があれば効率的な仲介支援ができたであろう。より多く訪れる就農以外の移住希望者に対し、サポートセンターが住民組織の関係性を繋ぐことで、広範囲で、かつ強固な支援によって移住希望者を移住地へ繋げる支援を行うことが出来るのではないか。

また、住民組織同士の得意分野についてもサポートセンターによって他地域・他組織の交流や関係構築を進めて行き、得意分野や地域課題同士の結びつきを後押ししていくことが必要である。得意分野と地域課題が結びつくことで、地域になかった新しい活動が生まれることや、地域課題を解決することが期待できるが、そのきっかけづくりをサポートセンターが担うことも考えられるのではないか。

住民組織の持っているものを活かし、不足するものを補うことで、こうした働きが各住民組織の成長や活性化につながるものと考えることからサポートセンターの機能を強化する必要があるのだろう。

そして、移住者と地域住民が、共に安心できる暮らしと活力ある集落を築いていけば、互いの得意分野と必要な支援が結びつき、コミュニティに根差したなりわいや活動を生みだすことができると考える。そして、集落が活発になり、地元の魅力に気づき、「地域資源」を活かした活動が生まれ、活力ある地域に育つと筆者は考える。

６．地域住民と移住者が安心して繋がるための取り組み

これまで移住者の受入支援を考え、地域住民と移住者と住民組織の関係を考察してきた。白川町の現状は、地域住民の互いの気持ちを表現し交流する場所が不足していたが、いち早く課題意識を持った地域では、「地域づくり協議会」として活動が生まれてきている。また、住民組織の得意分野が上手く繋がり機能していないことも明らかとなった。これまでの移住者支援に加えて、交流の機会もサポートすることで、これまで機能していなかった関係が機能するようになり、地域との強い関わりを活かした移住支援が可能となる。また新しい活動や創造的な仕事等も生まれるのではないだろうか。

これらを踏まえ、地域住民と移住者が安心して繋がるための取り組みを提言したい。

提言①　白川みらいのコミュニティサロンの開設及びファシリテーターの派遣

まずは、地域住民や移住者が自分たちの地域を知り考えるための場や機会を設けるため「白川みらいのコミュニティサロン」を開設する。地域の「雰囲気作り」醸成のため各地

域の役場出張所及び公民館等にサロンを開設し、後述するファシリテーターの派遣を行う。

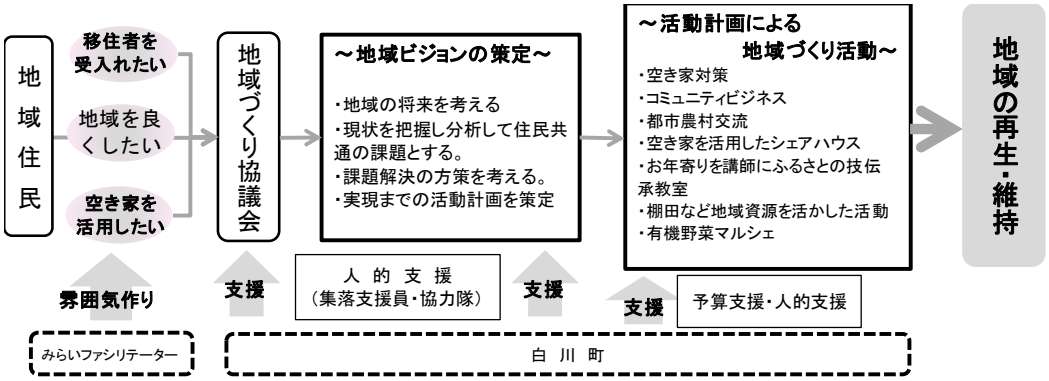
現在企画課が開講中の「まちづくりの担い手」養成講座では、町内外から 50 名以上の参加があり、地域住民や移住者、一般企業や公職者、役場職員等が「気づきを提供するファシリテーター」を目指して研修中である。研修後、修了したファシリテーターの組織を作り、最初は、行政が企画するサロンに対しその地域のファシリテーターが参加する。「地域の安心安全な暮らし」等のテーマによって地域住民の参加を呼び掛けて、話し合いの機会を重ねて行くことで、地域に交流と語りあいの機会が生まれる。徐々に地元住民のファシリテーターが育ち、地域ごとでこうしたサロンが運営されていくためにも、行政としても施設の提供や運営方法のサポートを行っていく。

また、サロンの運営には、ヒアリング調査で確認できた緑茶や珈琲にこだわりを持つ移住者が携わることも考えられる。サロンをカフェ形式にすれば、小商いの可能性もありさらに継続性も期待できる。移住者の活躍の場、また地域住民との語らいの場にコミュニティカフェは多くの可能性を持っている。

提言②　地域づくり協議会の設立育成のため「元気な地域をつくろまいか事業」を実施

前項のファシリテーター派遣によって、地域住民の気持ちを繋げ「雰囲気作り」がしっかり行われた後「地域づくり協議会」の設立をサポートする。事業については、鶴岡市集落対策事業を参考に、公募による募集を行い、継続的で主体的な活動が実施できる組織を優先的に支援する。組織の構成員は、地元住民だけではなく、移住者や他出した後継者、地域の行政職員も積極的に組織へ参加して地域の仲間を巻き込み、地域全体で話し合うことで「雰囲気」作りを行っていく。

図５．元気な地域を作ろまいか事業の概要　（出典：筆者作成）



次に、地域住民の意識や課題を集約した地域ビジョンを策定するための支援を行う。活動計画に基づき、移住者支援や都市農村交流等必要とした課題に取り組むことに対し行政は交付金や人的支援を実施する。また、地域おこし協力隊の都市農村交流企画を引き続き行い、内から外から活動を支援する。後述するサポートセンターによる住民組織の交流等によっても組織の支援や下支えが行われることも考えられる。事業の実施によって、地域ごとの組織育成が行われ、地域の主体性に合わせた、課題解決に向けた取り組みが期待できる。

提言③　サポートセンターによる住民組織の交流と組織ネットワーク構築

白川町には、「地域づくり協議会」や“ゆうきハートネット”の他にも、いくつかの住民組織が活動している。現在それぞれの組織は、理念に沿って各自活動を行っているため、他の住民組織がどのような活動を行っているのか知るすべをもたない状況である。そのため、サポートセンターによる住民組織の交流と組織ネットワークを構築することで、互いの得意分野や課題事項、活動地域が繋がることを期待したい。その上で、住民組織が活かせる得意分野や解決できる課題事項、新しい活動地域が広がることで多くの地域の効果が期待できるのではないか。

例えば、移住者受入支援であれば、都市農村交流活動を行う「地域づくり協議会」と有機農業を推進する“ゆうきハートネット”が連携することで、有機野菜の収穫体験や、有機野菜の朝市、身体に環境に優しい料理教室等地域環境に根差した活動を行い、地域住民と移住者と都市住民の交流によって、移住者や、農山村に移住することに対する理解を深められる。サポートセンターによる年数回の住民組織の代表者によるワークショップを行い、それぞれの活動内容を知ることで互いの連携やネットワークが構築されることが期待できる。

７．おわりに

このレポートを通じて、少しでも多くの人たちがこの白川町に暮らすには、どのような支援が可能であるかを考えてきた。そのひとつの答えは、真新しいものでもなく、大げさなものでもない昔から農山村に根付いていたことであった。住民同士助け合い、ふれあいを大切に、地域資源を守りながら暮らしてきた、その文化を取り戻していくことが、地域住民と移住者が安心して暮らしていくこの白川町の姿であることが分かった。

これまでは、地域住民の想いを聴き、移住者の想いを聴き、地元・地域を元気にするため活動する住民組織の想いを聴いてきた。どの人も強いふるさとへの気持ちを持っており、皆が集まり同じ目標に向かうことが出来れば、様々な問題も乗り越えられる強い力を感じ取れた。人口減少の進む日本のこの小さな農村で、小さな活動ではあるが、大きな可能性を秘めた地域住民の活動に、筆者は、行政として、地域住民として汗をかき、笑顔を交わして、共に誇り高い地域を築いていくことを決心する。

【引用・参考文献】

飯盛義徳(2015)『地域づくりのプラットフォーム　つながりをつくり、創発をうむ仕組みづくり』学芸出版社.

小田切徳夫(2014)『農山村は消滅しない』岩波新書.

小田切徳夫・筒井一伸編著(2016)『田園回帰の過去・現在・未来　移住者と創る新しい農山村』(シリーズ田園回帰３）農文協.

高野雅夫(2015)「若い世代が担う里山と山村地域の再生」,『人間文化研究所年報』10,PP.20-28,名古屋市立大学.

沼尾波子(2015)『交響する都市の農山村　対流型社会が生まれる』(シリーズ田園回帰４）農文協.

松永桂子・尾野寛明編著(2016)『ローカルに生きるソーシャルに働く　新しい仕事を創る若者たち』(シリーズ田園回帰５）農文協.

「特集　地域をもっとよくしたい　鶴岡市過疎地域集落対策事業」,『広報つるおか』2015 年 3 月,PP.2-3,鶴岡市.

<https://www.city.tsuruoka.lg.jp/shisei/kohojigyou/koho/koho-tssryuoka-h26/soumu20150301.files/20150301-2-3.pdf>

2016 年 12 月 16 日アクセス.

別添資料.1　特定非営利活動法人一覧表

法人名	設立認証年月日	保医福	社会教育	まち	学文芸ス	環境保全	災害救援	地域安全	男女共同	子ども	経済活動	職業雇用	消費者	連助援	分野数	目的(要約)
岐阜県環境防災技術研究会	H15.9.17					●	○	○							3	災害時の救援・普及活動・環境保全事業・防災対策の技術提案・環境防災パトロール等を行い、安心して暮らせるまちづくりを行う
岐阜県園芸福祉協会	H18.7.24	○	●	○	○	○			○	○		○		○	9	園芸福祉の普及・啓発・実践・研究事業 生きがいを持って生涯現役で暮らすための環境や文化創造を行う
白川手筒会	H21.1.8	○		●		○	○				○	○			6	手筒打ち上げ花火等に関する事業を行い地域の活性化を目指したまちづくりを行う
ゆうきハートネット	H23.2.16			●		○					○	○	○		5	安心安全健康でおいしい農畜産物を生産・提供することで生産者と消費者相互の信頼関係を深める 農村の多面的機能について理解を深め、農地の有効利用と地域の活性化を目指す
美濃白川どんぐり会	H24.10.5			○		●				○					3	落葉樹の植樹、落葉樹林の育成を通じで環境保全活動・清流活動・環境学習を実践して、公益的機能を重視した森林づくりとまちづくりを行う。

（出典：企画課特定非営利活動法人一覧表から）

別添資料.2　住民組織へのヒアリング調査結果

コミュニティ	上赤河 18名	東黒川自治協議会 協議会長　D.K	白北地区を良くする会 事務局　S.K	切井清流クラブ 代表　K.Y	NPO法人ゆうきハートネット 事務局　K.N
ヒアリング年月日	H29.1.3	H29.1.4	H29.1.4	H29.1.5	H28.12.14
少子高齢化が進むこれからの集落をどのように持続させるか	・子供に帰ってきてほしいが、現実は仕事が無いため難しい。 ・自分の代で終わるのも仕方ないと考えている人もいる。	・本心では、子供に帰ってきてほしい →仕事が無い。農林業では生活できない ・集落では”危機意識”は持っている →自分たちで精いっぱいの状態 ・仕事は町外へ出ても、地元に住むことならできるのでは。	・会では初めに「地域を知ってもらう」ことから始めた。外にも内にも →地元民でも名所を知らないことがある →地域を考えるきっかけになる ・地域を巻き込んでいくのは難しい ・学生との交流イベントを主に活動している	・まずは地元住民が楽しみながら「雰囲気作り」をする。人間関係や繋がり、きずなを再構築する。 ・交流を通じて良さを知ってもらう。 ・人が通い、移住や定住が生まれる	・昔は長男は家を継ぐことが当たり前だったが、今は田舎から出そうとしている。間違った教育。 ・いい学校がいい仕事に結びつき安定を求める時代では無くなった。企業に成長に依存しない暮らしになるのでは ・移住者が地域の暮らしと農地を守ってくれる有難い存在
現在までに移住者の受け入れをしたか	・田舎で余生を送るために移住して来られた方や、自然農のシングルマザーさんや、現在は４０代の独身男性が越して来られた	・有機農法の移住者をはじめ、施設農業（トマト）や田舎暮らしの高齢者が地域に移住してきている。	・近くの集落に入るか入っているそうだが、実際はよく知っていない。	・別荘代わりに空き家を購入して越して来る人はいた。 ・サービス業は、愛そうも大切	・現在の会員は37名 ・受け入れた移住者は、25組62名 ・現在5名の研修生受入中
受け入れた場合移住者との関係は良好か	・高齢化につれて交通の不便さや見守りの問題が出てきている。シングルは当初別の人が越して来る予定だったが思いがけない人が来た。子供の問題など理解に苦しむ点もあった。今は遠方に転出してしまった。	・やはり、移住して来られる人によって違う。 ・仕事や価値観が違う。見ているとイライラする人もいるかも知れないが、気長に見守る姿勢が大切。 ・近所付き合いのある人もいれば、付き合いをしたくない人もいる。	・まだ地域に移住者を十分に認識していない現状である。	「田舎の良さ」が分からないと長くは居られないのでは。	・受け入れた就農者と定期的な交流を続けており、移住者が新しい移住者をサポートする体制が整っている。
集落を持続するため移住者を受け入れるべきか	・集落の活気という観点から受入れが望ましいのでは ・社会現象となっているイメージ（よそ事？） ・出来るだけ呼びたい	・本心はUターンだが・・・ ・交流の時代である	・会の趣旨には、最終的に移住や定住を目標にしているが、まだその状況にない	・順番がある。優先順位 ・今の活動を自然体で、長く続けて行くことが重要 ・まずは、地元が変わらなければ	・移住者が地域の暮らしと農地を守ってくれている。 ・若い就農者がおおく、地域に溶け込むことが出来ている。→しっかり近所づきあいができる。
受け入れる場合集落の支援は可能か	・地元の年寄りが合わせる必要がある ・毛嫌いしたらダメ	・小さなコミュニティ（班）からのお付き合いが大切 ・地元の付き合いが出来て”信頼”が生まれる。 ・近所の人に知られれば”だいたいの姿”が解るようになる ・来てくれれば→受け身である。積極性がない	・まだ”入口”の状況である。 ・学生との交流のみ	・夫婦で移住した場合、母親が孤独にならないか？ →集落で仲間意識	
移住者のなりわい（仕事）について集落が支援できることは	・地元の移住者ではないが、地元の工務店を紹介してあげた（現在そこに就職している） ・下米田では一反の田圃で農業が出来るらしい。地元でも貸すことができるのでは？	・移住者がどのような特技を持っているのかわからない。しかしひけらかすと拒絶してしまう。 →特技を披露できる機会を周りが作ってあげる ・日頃からの付き合いが大切	・仕事が大切だと思っている。 ・若い人に魅力ある仕事。	・仕事は町外へ稼ぎに行き、週末は地元で楽しむ方法。	・メンバーが各地域から集まっており、空き家と農地を紹介することが出来ている。 ・くわやま結びの家や、新規就農者の研修施設がある。1年間先輩移住者のところに研修してノウハウを身につける
移住者の住まいについて集落が支援できることは	・空き家を貸してあげたいが、まだ使うかもしれない。	・空き家の家主は地元に親戚など管理人がいれば安心して貸せる。 →管理人が監視役になり相談役になる。貸しても酷いことは出来ないだろう。 ・空き家の家主も家を維持していくのは大変だと思っている。	・空き家を使ったイベント	・民泊。人が集まり、お金が周り、人を呼ぶところから交流が生まれる。	・上記と同じだが、ゆうきハートネットの会員が各地区にいるため、空き家の情報など地域から拾い上げやすい。
その他	・シングルの問題で、地元の方が仲介したが想定した別の人が移住してきた。家主に顔を合わせられなかった。 ・移住者は無責任だ。	・定年過ぎた人も農地を守ってくれる有難い存在である。	・イベントや交流に「来てほしい人」や若者が来ない。 →”広域”で若者が集える場所が必要 ・学生との交流イベントでは、地元のお年寄りが張り切って、楽しそうに準備をしてくれている。 ・事務局が役場公民館にあることから、地元の意識が行政任せになりがち	・地元住民は、地域の長所をなかなか言えなくなってしまっている。 ・”水”の大切さを内外にPRする ・田舎の人の良さが一番大切	

（出典：筆者ヒアリングによる）

別添資料.3　移住者に対するヒアリング調査結果

出身地
名古屋市(T.K)　名古屋(K.T)　名古屋市中村区(Y.B)　名古屋中村区(R.H)　名古屋市千種区（借家）(Y.S)
茨城県(K.S)　福岡県(H.S)　岐阜市(K.K)　愛知県春日井市(K.I)　和歌山県岩出市(M)
白川町（Ｕターン）(K.N)　秋田県(U.T)　大阪→関東をｸﾞﾙｸﾞﾙ→千葉(S.T)　美濃市(T.K)

移住した時期
H23(T.K)　H28 年今年(K.T)　H26(Y.B)　H27(T.I)　H28(R.H)　H18(Y.S)　H24(K.S)　H24(H.S)
H23～研修(K.K)　H21(K.I)　H21(M)　39 歳で親の跡継ぎのためＵターン、工場で 55 歳まで。その後脱サラ(K.N)
H26.10→H27.4～(U.T)　H26.10→H27.4～(S.T)　H23　里山古民家が理想(T.K)

移住前住居・職種
ビールサーバーのメンテナンス(T.K)　ＩＴ業(Y.B)　(T.I)
コーヒー豆の卸業者(R.H)　布、幟旗のデザイン(Y.S)@愛知県東海市
住宅設備メーカーの技術者(K.S)@愛知県東海市
OL(H.S)″″愛知県刈谷市　豊田織機　設計技術者(K.K)@愛知県春日井市
水処理企業(日本碍子)(K.I)@名古屋　自動車設計ＳＥ(M)
鵜沼在住　名古屋で学校教員(K.N)@横浜市　種苗会社（13 年間勤務）(U.T)@東京都
ＣＡＮＯＮ地財管理部門(S.T)　名古屋市でＯＬデスクワーク(T.K)

移住のきっかけ
・田舎ＬＯＶＥ(K.T)
・中村区都会のごちゃごちゃが嫌い。田舎のようなゆとりある生活がしたい(Y.B)
・不動産屋さんの紹介相場より高い金額で買ってしまった。(T.I)
・田舎暮らしＨＰ武儀郡を当たって次に見つけたのが白川町(R.H)
・子供のアレルギーから子供にとってすごしやすい環境で、地に足のついた生き方をしたい。(Y.S)
・子供のころの源体験もあり山が昔から好きで、山に近いところに住みたかった(K.S)
・根っからの都会っ子。しかし祖父が良く山村で農業体験をさせてくれていた。昔から意識していた。(H.S)
・以前から環境や流通、食料自給率問題などを考えていて、いずれ農山村に住みたいと思っていたが、いろんなご縁で白川町に住むことになった。(K.K)
・環境に関心があり関連企業に就職したが、実際の仕事は環境とはかけ離れてものだった。また、母の不幸により健康に関心が特に食物への関心が高まった。雑誌を頼りに有機農業の研修で山梨県へ１年間研修した。(K.I)
・都会の激務に疑問を抱き、まちの生活も長かったため田舎でのんびり暮したくなった。知り合いに紹介してもらった稲刈りイベントで縁があった(M)
・美濃市のクライミングで岐阜に魅力を感じた。都市はずっと住む所でないと思っていた。農山村に住む方法・手段として有機農業を選択した。(U.T)
・美濃市の福部の森　古民家を購入して宿をやっている人に衝撃を受けた。「水がいい」お茶が美味しい(S.T)
・名古屋での仕事（自然が無い）親族の死（54 歳）→早いうちにやりたいことやりたい。海にあこがれ離島に移住→3.11 経験お金があるが食べ物が無い。地元を見直すきっかけに(T.K)″

白川町を知った情報源
・名古屋市で開催されている朝市村(T.K)
・奥さんが白川町の有機野菜宅配ボックスを１０年近く利用していた(K.T)
・名古屋市であった移住フェアのようなイベントで知った。(Y.B)
・不動産ＨＰからよさそうな物件を見つけたから(T.I)
・田舎暮らしのＨＰ(R.H)
・有機野菜のマルシェ主催の友人から(Y.S)
・オアシスのマルシェで N.K さんに出会った(K.S)
・HP ごえん農園で知っていたが、オアシスの N.K さんと出会って様々な人と繋がるようになった。(K.K)
・Y.S さんに名古屋で出会って白川町の存在を知った。佐見の結びの家、有機農業(K.I)
・はざがけトラスト Y.S さん。最初の研修先はトマトの克己さん(M)
・昔は長男だからといって、みんな実家へ帰って来ていた。全国な問題だが、親の世代が子供に帰ってこなくてよい教育をしている。(K.N)
・クライミングもあり東海地方で移住先を探した。きっかけはオアシス朝市村ご縁から K.N につながった(U.T)
・山に７時間もかけて通うのが嫌になった。岐阜のファンクラブにも入会した。(S.T)
・WOOF JAPAN というサイト労働力と住処食の対価ｳｰﾌｧｰ外国人(T.K)″

移住先を決めた理由
・有機農業をやりたくて、研修先を探していた。佐見地区の「結びの家」で１年研修して住居を探してもらって今の場所を紹介された。タイミングが良かった。(T.K)
・ほかにも移住者が居て、何とかなると思った。(K.T)
・農園付きコテージだが住むところがあったから。(Y.B)
・周りがなんにもないところに住みたかった。(R.H)
・白川町の人たちの人柄　風景の美しさ　実際に移住場所はグーグルアースで周りの状況など良好な場所を選んだ(Y.S)
・決まっちゃった感もあるが、白川町の景色が綺麗で（石垣が綺麗）有名な山も近くにあり地元の支援で住宅も決まったから。(K.S)
・ごえん農園 HP やオアシスのイベント、瑞浪市のイベントで K.S さんに偶然出会ったことなど、白川町に縁があると思った。(K.K)
・周りに仲間がいることで安心した。(K.I)
・昔はいい学校いい仕事で安定がすべてだったが、現在はそうでなくなった。動きにいち早く気がついた。企業に依存しない成長戦略(K.N)
・奥さんもそれとなく、移住のことを考えていたのかも。(U.T)
・最初は東白川村に地元石油店の親戚関係から移住先が決まった(T.K)″

28 期沼尾ゼミ　白川町　鈴村　元秀

行政から受けた支援策・受けたかった支援策
・農地のあっせん(T.K)
・空き家や仕事のＰＲをもっとするべき。社長の話を聞いたが人手不足で仕事はたくさんある。(K.T)
・住居の紹介。いまは、条件に合った空き家を探している。ほかにも候補地があったが、白川町が一番親身になって相談に乗ってくれた。(Y.B)
・田んぼなどの農地を借りたい。水稲などの研修をやってほしい(T.I)
・空き家バンク（サポートセンター）修繕費や家賃補助を利用したい。(R.H)
・農地の借地契約(Y.S)
・移住当初は特になかった。今後は、たまに気にしてくれるなど存在を認めてあげる程度の声かけなどがあるとよい。また、他地域や人との交流の機会（自然にふみ込めて付き合いができるきっかけ）があるとよい(K.S)″
・移住先候補としていろいろなところを回った。長野県阿智村の役場担当者が親身になってくれていたが、良い農地が見つからなかったので断念した経緯がある。その当初で移住受け入れに積極的なのは珍しかった(H.S)
・当時は、空き家から農地まですべて K.N さんなど地元の人が動いてくれていた。行政の支援というのはほぼなかったと思う(K.K)
・山梨県は、農協が農機具をレンタルしてくれる制度があった。大きな法人では制度があるが自分たちのような農業にはないので支援があるとうれしい。(K.I)
・売り先が町内青空市場のみであるが、手軽なフリーマーケットがあるといい。少数小品目でも小金稼ぎができる場所(M)
・窓口として、役場に相談に行けば様々な支援策に繋げてくれる。バイオマス、家賃補助、改修費補助など(U.T)
・通学などアクセスに行政の支援が欲しい。(S.T)

地元から受けた支援策・受けたかった支援策
・藤井俊幸さんに住居を探してもらった。農地は研修時から小倉の農地を借りている。裏山にシイタケ栽培。(T.K)
・加藤智士さんから住居の紹介。現在の住居が交渉困難になったときも、次の候補地を勧めてくれるくらい親身になってくれた(K.T)
・鮎の友釣り。家を建てるための土地を提供してくれる。(Y.B)
・地元の名士の親戚の方に土地を紹介してもらい、さらに地主との間に入って交渉もしてくれた。(Y.S)
・最初は、黒川の K.N さんが紹介してくれたが黒川に良い農地がなかったので、佐見の中島さんに託されいろいろ当たってくれて今のところが決まった。農地も住宅も中島さんがすべて面倒を見てくれた(K.S)
・K.N さんの紹介で、研修中に空き家を借りることもできた。農地もその当時は、法人化されておらず比較的借りやすかった。(K.K)
・K.N さんの紹介で、空き家を紹介されてた。家主と K.N さんと三者で面談があった。奥さんも K.N さんの紹介で結婚した。(K.I)
・ＮＰＯゆうきハートネットの K.N さんの紹介で佐見で研修を受けた。研修後の住居も同ＮＰＯの中山久喜さんに空き家を紹介頂いた。(M)
・住居は、K.N さんから空き家近くの俊幸さんの紹介でとんとん拍子で決まった。困ったのは農地で現在の集落営農で農地が借りれなかった。空いた農地は日当たりや水はけなど条件不利地。農地集積契約更新時期に合わせて何とか借りることが出来た。(U.T)
・お試し住居中に近所のお年寄りが何度も気にかけて訪ねて来てくれた。別の人は、食料品などをたくさんもらったが、使いきれないということで返してしまった。夫に叱られ謝りに行ったら、さらにたくさんの食料品をもらってしまった。(S.T)
・何とかやっていけるという感覚　人の縁(T.K)

仕事以外での地域活動
・バンドを最近始めた。生活がだいぶ落ち着いてほかの活動ができるくらいまで余裕ができてきた。ギターを担当。東白川、加子母、付知のメンバーと。１１月末に黒川の朝市で披露予定(T.K)
・デコレーション業、布や竹などで。デザイン。(K.T)
・公民館活動（エイサー）に参加(T.I)
・保育園の保護者会長千葉の国際芸術祭でワークショップ（どろ団子）子供アートの講師（奥さん）(Y.S)
・他移住者や原住民とスカバンドを結成して練習中である。農作業のオペレーター、山仕事、消防団(K.S)
・コミュニケーション講座乳幼児学級　学級長千葉県でフリーペーパーの記者をされていた(H.S)″
・移住者仲間で、個人塾を開いて小中学生を教えている。子供に自信が無いことが気になるが…自己肯定感。食べる通信　車座キャラバン大豆トラスト。フリースクールの知り合いに引き籠りを受け入れる構想をしている。農業で変わらないか消防団(K.K)
・児嶋さんと協働で個人塾を開いている。以前はバレーボール教室も行っていたが忙しくて行けていない。消防団にも入団している。奥さんは美大出身なのでチラシや名刺作りを頼まれることもある。(K.I)
・ＮＰＯゆうきハートネットの集会に良く参加する。米の育苗作業などの共同作業など。大豆トラスト(M)
・佐伯さんに誘われてボルタリングの活動を。自分のようなコアなクライミング層とゆるいボルタリングのようなすそ野を広げる活動も大切だと感じた。消防団、どんぐり会、トレッキングクラブ(U.T)
・ヨガインストラクター　地元のお嫁さんのスキルを活かす(T.K)″

趣味・特技
・ギター・ボクシング（Ｃ級ライセンス）(R.H)
・趣味が仕事のようなもの・ストローベイルハウス＝ワラと泥の壁の家(Y.S)
・山登り・レゲエ（ダブ・スカ・ロックステディ）(K.S)
・山登り（山小屋経営も考えた）(H.S)
・アウトドア、山のぼり、滝登り(K.K)
・カメラ(K.I)
・家を自分でリフォーム中、漆喰やベンガラなど音楽、ロック、ボサノバ(M)
・クライミング　町内でも良い環境の場所もある。町としてバックアップ出来れば人が集まるかも(U.T)
・ウクレレ(T.K)

その他
・消防団(T.K)〃
・夢花畑。裏山に小屋を建てる。きこり・農業仲間達と和紅茶を栽培販売している。(K.T)
・仕事が製材の設計業で、奥様が看護師。下呂市と金山町で今の住所で一番都合がいい。子供が高校に通学することが不便でかわいそうだ。(Y.B)
・友人をよく白川町に招待している。招待した友人の中にはこちらに別荘を購入して将来的には越してきても良いと考える人もいた。(T.I)
・建築業者の営業（鈴村建築）(R.H)
・いろいろなグループを俯瞰して繋げる場（イベント）を設けてほしい。いきなり「移住」でなく、交流から借家暮らし、住居の土地購入と段階を踏めたのが良かった。(Y.S)
・埋もれている昔の里道を歩いてみたい。自分たちは、農業が目的で来ていなくて、山村に暮らすことが目的で、農業は手段であっただけ。現在は水田を１町歩２反経営している。地籍調査もイベントにできるのでは？(K.S)
・ボランティアでやっていたフィールドトリップで、お年寄りや地域の人たちと話すことが楽しくなった。イベントの・企画立案などもやっていた。常滑で。無償でやっていたが、こうした経験や技術習得を無料で出来るという考えでやっていた。(H.S)
・農業だけでは集客に限界がある。アウトドアやラフティングなどとコラボして。※食料自給率を指標に地域の循環を図ることをしたら面白いね。食育とかにも。油が足りていなければ菜種油をとか。白川手筒会のメンバーを知って、白川にも面白い人・活動があるんだなと。活動やグループを知り合える機会があるといい。(K.K)
・お茶畑が借家の裏にあり、移住１年はお茶もやっていたが、家主が太陽光にするため出来なくなってしまった。(M)
・今後の展望、農地が不足するようになってきた。現在ネットやＳＮＳでのＰＲを配信されているが、他の団体との連携・連絡調整おねがいします。(K.N)
・集落営農のオペレーターもやっている。農地を借りることが難しいのであれば、気軽に移住者を呼ぶことが出来ないのではないか。堆肥づくりと育苗土と種苗などの取り組みも行っている。(U.T)
・甘えていい安心感。他意が無い。今まではなるべく貸し借りをつくらないように生活してきた。3.11 の時、家族が離れ離れになってしまった。お金があるが食料も電力もない。都市の軟弱さに不安になってしまった。ゴミゴミした空間から、山が見える景色へのあこがれ(S.T)
・お金じゃない経済を回したい(T.K)

（出典：筆者ヒアリングによる）